
D,C,2 アナザーストーリーズ ~大切な今~

餡子餅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D / C / 2 アナザーストーリーズ ～大切な今～

【Nコード】

N3884F

【作者名】

餡子餅

【あらすじ】

桜が枯れてから2年が経った桜内義之は、付属から本校にあがり、現在2年生そして、その彼女・・・雪村杏も一緒に、本校2年、義之と同じクラスになっていた・・・

第一章

ピピピッ ピピピッ

「んっ……」

ピピピッ ピピピッ

「……しるせい……けど、起きるか……」
ピピッ……

「ふああ……」

ベッドから降りると大欠伸をする俺……桜内義之が居た
「さてと……飯でも作らないとな」

ゆっくりと階段を降りて行き、和室に入る……

はあ……やっぱり居たよ……

「あ、兄さん。おはよ」

こたつに入ってゴロゴロしていた、由夢が居た

「随分と早いな……そんなに腹が減ったか？」

「兄さんこそ……それより兄さん、お腹が空いたよお」

いかにも空腹そうな顔をしてこつちを見る

「来るなら事前に言えよな……今日も早いんだからな」

「いいじゃないかい……それより兄さん、ご飯」

話題を逸らす由夢……ちゃんと話は聞けよ……

「んで、何が良いんだ？」

立ち上がると、由夢を見る

「暖かい味噌汁が良い……」

「味噌汁な……」

とりあえずキッチンに向かう

数十分後

「ホラ、朝飯が出来たぞ」

リクエスト通り、暖かい味噌汁と、ご飯を持ってくる

「いただきます」

朝食を運んでくると、由夢がこたつから出てそう言い、食べ始める

「ん・・・いただきます」

俺も朝食を食べ始める

結構冷えるな・・・今日も・・・

そう・・・季節は冬、12月なのである。

この時期は特に忙しい・・・そう、生徒会副会長をやってる俺としては、とても・・・

ゆっくりと朝食を食べ終わると、皿を洗い、着替える

・・・今日も早いな・・・

「ほんじゃ、由夢、後から出るなら鍵かけとけよ」

扉の前まで来ると、和室に居る由夢に向かって言う。

「わかってますよ、兄さんも気をつけてくださいね」

それに返事をしてくる由夢

うん、それならよし・・・

「それじゃ、行って来る」

扉から出ると、結構外は寒かった

「ホント、最近は寒くなつたな・・・」

寒い寒いと言うが、外を見ると、桜が咲いている・・・

「こっ、冬に桜が咲いてると・・・やっぱ実感が湧かないなあ・・・ま、慣れたけど」

そのまま家を出て学校に向かい歩き出した義之であった

第二章

いつも通りの通学路を歩く

道のまわりには、桜の木が何本も生えている

・・・やっぱ、季節外れだよな・・・この桜・・・

そんなことを考えていると、いつの間にか、もう校門前の道を歩いていた

時間もまだ、早く、それほど生徒の姿は見ない・・・

そして、いつも来る場所・・・この、バス停の前まで来る

いつもは、俺が先に着くけど、今日は朝飯のこともあって、少し遅れた・・・

だから、バス停前には、俺がいつも一緒にいる、大切な彼女・・・雪村杏が、先客として居た

「あら、少し遅かったわね・・・」

近くのベンチに座りながらこつちを向いて言う

「悪い悪い・・・朝飯作るのに時間がかかったら」

「まあ、いいわ・・・私も、今来たばかりだったからね・・・」

ベンチから立ち上がると、その小柄な体を俺に寄せてくる

「おう・・・じゃあ、行くか」

相手の手を取ると、学校に向かって歩き出す

握った彼女の手は冷えていた・・・

「お前・・・ちよつと、冷えているけど・・・大丈夫か？」

「少しだけだし、平気よ。心配しなくていいわ」

少し心配そうな表情をする

「本当に大丈夫よ・・・ほら、行きましょ」

杏が俺の手を引っ張る

「わっ・・・わかった・・・」

そのまま一緒に歩いて数分後、俺らは学園についた
下駄箱まで行き、靴を履き替える

「よしと・・・じゃ、行こうぜ」

杏の方を見る

「そうね・・・」

小さく笑いながらこっちに寄ってくる・・・

そして、教室まで行こうとする・・・すると・・・

「ハーツハツハツハ！朝から2人で登校かぁ、桜内」

・・・ああ、幻聴であって欲しい・・・今俺の目の前に居るコイツも幻覚であって欲しい・・・

ホントにウザい・・・

「・・・朝からなんだよ、杉並」

「ん〜、朝から桜内の姿を見かけたのでなぁ・・・声をかけたのだ」

コイツは杉並・・・俺らと同じクラスで、昔よくつるんでた悪友だ・

・

なぜか、コイツとは毎年同じクラスになる・・・

そう、付属に居たときから本校入学。そして、今も同じクラス・・・裏で何かやってんじゃないのか？と疑うこともよくある

「・・・声かけんのは良いけど、半分弄り混ぜってなかったか？」

少々呆れ顔をする

「まあ、良いではないか・・・それよりだ、桜内・・・クリパの件だが、良い企画が・・・」

「断る」

また何か悪巧みしてんのか・・・俺は生徒会だぞ？

お前の悪巧みに乗ってられるかよ・・・

「そうよ、私たちは生徒会・・・昔のように、乗るわけにはいかないの」

後から続いて杏が言う

「んだな。そういうわけだ」

一度杏を見た後、杉並の方を向く

「残念だ・・・非常に残念だ・・・だが、この企画をやめるのも、それは楽しみにしている他の同士に

申し訳ないしな・・・まあ、止めるのなら、止めてみるがいいさ！
ハハハハハハハ！」

高笑いをしながら、どこかへと行ってしまっ

「このまま戻ってきて欲しくないな・・・というか、その企画って
のもいい加減にして欲しいよ」

ため息を吐くと、杏が声をかけてくる

「ふふっ・・・そうね。でも、これはこれで張り合いがあって面白
いじゃない」

小さく微笑みながら言う

「まあ、毎回それで疲れるけどな・・・」

苦笑をすると、また歩き出す

「今年は何をするつもりかしら・・・」

「そうだなあ・・・まあ、何をしようが、俺らが止めないとな」
相手を見ると、微笑みかける

「まあ、そうね・・・」

杏も俺のことを見て、小さく微笑み返してくれる

「おう」

そんな話をしている間に、教室の前までたどり着いてた
そして、教室の扉を開ける

教室内には、数名の生徒しかいなかった

先ほどまで下駄箱に居た杉並は、教室にはいない

・・・あいつ、どこ行ったんだよ

なんて思いながら、席につく

「ふあ・・・んん・・・」

席につくと、欠伸をする

「あら、まだ眠いの？」

そんな俺を見た杏が声をかけてくる

「外も寒いし・・・まだ寝てたかったかな」

ははっ苦笑する

「ふふっ・・・そうね、確かに寒いけど・・・でも、大事な彼女を朝からずっと待たせるのもダメよ」

杏が悪戯っぽく言う

「わかってるって」

時間が経つにつれて人が増えていく

そして、授業の始まる時間

この時間は正直、ボーっとしていた

この風見学園に入り、皆と出会って・・・そして、杏と付き合い始めて・・・

そんなことを、何となく振り返っていた

ボーっとしているうちに、授業は終わった

・・・そして休み時間

俺はクラスの連中と一緒に話していた

「さて、今年のクリパだが・・・」

またクリパの話を持ち出す杉並

いつの間に戻ってきたのかよ・・・

「ダメだよ、杉並君。義之君と杏ちゃんの邪魔しちゃあ」

杉並を止めようとしてくれる、俺のクラスメイト、花咲茜

杏と、今は離れている俺の幼馴染、月島小恋と仲が良い

「邪魔しちゃったら、せつかくのラブラブするところを見れないじゃない」

・・・お前なあ、人の行動を面白半分で見るとよ

「そうね、せつかく楽しめそうなんだから・・・」

笑いながら杏が言う

茜へのツッコミは無しかよ

「おおっと、そうであったなあ・・・俺が邪魔しちゃあ、生徒会も動くわけだしなあ・・・」

おっ・・・意外と効果が効いてるのか？

「だが！この企画を楽しみにしてくれている、我が仲間もいるんで

な・・・悪いが、今年もやらせて
もらおう」

・・・訂正、やっぱり効果無い・・・

「ま、どうにせよ・・・面倒ごとにはさせねえよ。な、杏」
そんなことを言っつて杏を見る

「そうね、義之のいう通りよ・・・」

杏がこつちを一度見る

「むう・・・今年も、手強そうだな・・・まあ、頑張るがいいさ」
不敵に笑う杉並

「あつ、そろそろチャイム鳴るよ。早く席に着かないと」

茜が時計を見て、そう言う

「じゃ、また次の休み時間ね」

杏も、そう言うと自分の席に着く

続いて杉並も席に着くと同時に、チャイムが鳴った

第三章

あれから何時間経ったろ・・・

午前の授業は終わって、今は昼休み

授業中は、ずっとボーっとしていて、先生の話などは殆ど聞いてない
幸い、指摘も何もされなかったのがよかったな・・・

それより・・・

「ああ、今日も弁当無しか・・・」

・・・作ってくるのを、そっぴや忘れてたな・・・

んま、しょうがない・・・学食にでも行くか

などと、思っていたところ、ある人物が話しかけてきた

「義之、お弁当作ってきたから、一緒に食べない？」

振り返ると、後ろには杏が居た

「どうせ、今日もまたお弁当忘れたんでしょ」

自分の弁当を見せ付けてくる杏

「んで、何だ・・・一緒に食べようってか？」

笑いながら言う俺

「そっよ。感謝してよね」

悪戯っぽく微笑む杏

・・・やっぱ、可愛いよな・・・

などと思ってしまう

「おう、感謝感謝・・・」

「ふふっ・・・そっね・・・屋上行かない？あそこなら、人は来ないし」

笑いながら、移動しようという提案を出す

「そっだな。んじゃ、行くか」

席から立ち上がると、杏と並んで歩く

そして、屋上

辺りを見回しても、誰も居ない

まさに2人だけの世界

「さ、座りましょ」

その屋上の隅っこに座る

「よいしょ・・・」

杏の隣に座る

そして、杏は持っていた弁当を取り出し、フタをあける

「おお・・・これまた豪勢だな」

弁当箱の中には、杏手作りの料理がいっぱいにしきつめられている

・・・見るからに、美味そうだな、うん

「はい、どうぞ」

箸を2本取り出し、1本俺に渡す

「んじゃ、いただきまーす」

弁当箱から、玉子焼きを取って食べる

「おっ・・・美味しい・・・」

良い具合に味のバランスがとれていて、ふっくら柔らかく焼いてあ

る・・・

「すっごく美味しいよ」

そう言い杏に微笑みかける

「ふふっ・・・おだてても何も出ないわよ」

杏も、笑いながら言う

そして、2人で弁当食べ続けた・・・

食べ終わってから、どれくらいが経ったんだろう・・・

チャイムが鳴っていない辺り、まだ授業は始まってないんだろう

この静かな空間に俺と、杏の2人きり

さっきまで寒いと感じていたが、杏と一緒に弁当を食べるのに熱心

になっており、寒いことなど

忘れていた

「にしても・・・もうすぐ3年経つんだな・・・」

静かなこの空間の中に、俺の声が響き渡る

「そうね・・・意外と早いものね」

杏が俺を見て言う

「今考えると、まさか俺が生徒会の副会長になるなんて・・・杏と付き合わなければ考えられなかつ

つたな・・・」

そう・・・俺が副会長なんて、以前の俺だったら考えられないことだ俺が副会長になった理由つても・・・ほんの数ヶ月前に決めたことなんだし

数ヶ月前

音姉たちが卒業間近の時、俺と杏は音姉に呼ばれた俺らは言われたとおりに、家で音姉を待っていた

「音姉、何かあったのか・・・？」

そう呟きながら首をかしげている俺

「そうね・・・何の用かしら・・・」

隣で呟く杏

そんなことを考えながら数分

音姉はやってきた

「遅くなってごめん」

息を切らして登場した彼女は、朝倉音姫

2学年上で、俺の姉的存在

生徒会の会長をやっている、いつも忙しい

多分、今回遅れた原因つても、生徒会の仕事なんだろうな

「音姉、大丈夫か？」

少し心配そうに音姉を見る

「あはは、大丈夫・・・でも、急いで走ってきちゃったから・・・

ふう・・・」

呼吸を整えながら言う

そして、さらに誰かの声が聞こえる

「まったく、急ぎすぎだよ、音姫」

後ろから出てきたのは、高坂まゆき

生徒会の副会長にして、音姉の大親友

運動部に所属しており、その運動神経は学園でもトップクラス

そんな2人が出てきて俺と杏は首を傾げる

とりあえず、4人みんなテーブルに座ると、音姉がしゃべりだす

「ふう・・・今日は、ごめんね？急に呼び出しちゃって」

少し申し訳なさそうに言う

「いえ、今日は特に何も用事がなかったので、平気でしたし・・・」
続いて杏が喋る

「そそ・・・俺らは全然大丈夫・・・それより、話って何？」

音姉を見て俺が言う

すると、今度はまゆき先輩が口を開けて

「ほら、もうすぐ・・・あたしたちって、卒業でしょ？」

そう・・・もうすぐ、卒業式なのだ

そして、まゆき先輩も、音姉も卒業するわけだ

「それでね・・・2人にお願いがあって・・・」

音姉が俺と杏を見ながら言う

「お願い・・・？」

首を傾げる俺

「うん、あのね・・・次の、生徒会会長と副会長を、弟くん
と雪村さんにやってほしいの」

真剣そうな瞳で言い、俺らを見てくる

正直、俺の中では今の言葉がまだ駆け巡っている

「・・・俺らが・・・生徒会・・・？」

そう俺が呟き

「でも・・・なんで私たちが？」

杏も不思議そうに思っているような顔をしている

次はまゆき先輩が

「それがね、音姫が・・・どうしても、弟くんにやってほしいって」

・・・は？

「それは・・・どういう・・・」

困惑気味の俺

そして音姉が

「弟くん、意外とこの仕事があうかも・・・って思ったの。でも、弟くん1人なのは心配で・・・」

少し心配そうな表情をする音姉

「でね、雪村さんも・・・結構合うと思ったのよ。それに弟くんと一緒なら、大丈夫かなって」

今度は微笑む

「音姉・・・言ってることが何だか段々ごっちゃって感じに・・・少し落ち着いて」

音姉を少し止めてくれるまゆき先輩

「・・・確かにこんな一気に言われても処理が出来ない

「えっ、あ、うん・・・それで・・・どうかな？弟くん、雪村さん」
首をかしげて見てくる音姉

「まあ、あたしからも・・・あんた達なら、何だか安心だし」

音姉に続いてまゆき先輩が言う

「・・・俺は、まあ・・・良いけど・・・」

そう言い杏を見る

「・・・義之がやるなら・・・」

杏が俺を見る、そして

「わかりました。私も良いですよ・・・でも、選挙とかは・・・」

そう、心配はそこなのだ・・・

やはり、生徒会の会長、副会長になるには、投票で票をいれれないといけない・・・

「大丈夫。そこは、もう先生方と話したから」
胸を張って言う音姉

・・・もう、お決まりみたいだな・・・

「・・・じゃ、頑張らないとな・・・」

「ふふっ・・・そうね・・・頑張らなくちゃ」

・・・そんな風にほぼ強制的に決まった

その後、音姉たちは卒業

それと同時に、俺と杏が生徒会の立場に立つことになった

・・・ホント、もしも杏がいなきゃ、こんな仕事もしてないんだよななどと、昔のことを思い出す

「義之・・・義之？」

俺を呼ぶ声・・・杏の声が聞こえた

「どうしたの？ポーっとして・・・」

「ああ、いやな・・・色々、前のことを思い出してた」

苦笑しながら言う

「もう・・・ちよっと心配したじゃないの・・・」

そう言いながら俺の腕に抱きつく

「ははっ・・・悪い悪い・・・」

「もう・・・罰として・・・」

そっとうと顔を近づけてくる

「えっ・・・」

俺が口をあげようとした瞬間、杏の唇と俺の唇が重なった

そして少し経ち

「ふふっ・・・心配させた罰よ」

悪戯な笑みを浮かべる杏

「んっ・・・罰と言うの褒美？」

と、冗談を口にしてみる

そんな会話を2人でして、どれくらい経つたらう

結構時間は経つたのに、未だにチャイムは鳴らない

とりあえず携帯を取り出そうとすると・・・

バタンツ！！

突然ドアが開く音がする

「何だ?!」

素早くドアの方を見る

「はぁ・・・はぁ・・・あつ、義之！お前、何やってんだよ！授業始まってんぞ！」

そこから現れたのは板橋渉

これもまた同じクラスの友人

必死で探してたんだろうか、呼吸がとても荒い

「マジかよっ！何でチャイムが・・・」

すぐに立ち上がる俺

「お前・・・今日は、昼後のチャイム鳴らないって、朝言われたろ・・・」

あつ・・・すっかり忘れてた・・・

「義之、早く行きましょ」

「あぁ、そうだな・・・」

杏の手をとり、走りだす

そして渉もついてくる

その後教室に戻って、先生から説教を喰らったのは言うまでもないだろう

第四章

午後の授業は、結局先生からの説教で終わった

「まったく・・・これからは気をつけるようにしろよ？2人とも」

先生はそう言つと、俺らをやつと解放してくれた

たった約1時間だったのが、随分と長く感じられた

「ふう・・・やつと帰れる」

帰りの仕度を済ませて、杏のもとへ行く

「杏、帰らないか？」

ちよつと帰りの仕度が終わった杏に話しかける

「今日は生徒会の集まりもないし・・・そうだ、だったらどこか行かない？」

俺に寄り添つて、そう言う

「おつ、それも良いな。んでも、どこに行くんだ？金も無いし・・・」

「

まあ金があつたら、今日の昼食んとき苦労しないわな

「安心して、今日は私のおごりよ」

財布をチラつと見せ付けてくる

「んでも、悪いって・・・最近、杏におごられっぱなしだったし」

「あら、別に気にしてないわよ？それに、別の形でお返しはしてもらつてるしね・・・ふふっ・・・」

小さく微笑むと、悪戯っぽく言う

・・・お前、そんな恥ずかしいことあっさりと言つなよな・・・
頬を少しあからめる俺

「ま、まあ・・・じゃあ、よろしくお願いします」

何故か敬語になる俺

「わかつたわ・・・」

そう言つと杏は自分の小さな手で、俺の手を握ってくる

そして、俺も手を握り返す

俺は杏の手をひき、商店街の方へ歩いて行った
大体、学校後のデートと言つと、ここが定番だ
少し歩きながら、店の外から商品を眺めたり、気に入ったり気にな
るものがあつたら

その店に入る

そんなことを繰り返している中、少し腹が減つたのか俺の腹の虫が
鳴きだした

「お腹、空いたの？」

腹の音に気づいた杏が俺を見る

「ん？ああ、少しな・・・」

苦笑して俺は言う

「そう・・・私も、ちょっとお腹が空いたし・・・『花より団子』
にでも行く？」

『花より団子』、雪月花三人娘や、その仲間が前からよく行つて
行きつけの店

昔はよく俺も連れてかれつてつたなあ・・・

数分歩いていくと目指していた店・・・

『花より団子』が見えて来た

そして店に入り、適当な席に座る
すると、

「あ！義之君、杏ちゃん」

聞きなれた声が、どこかから聞こえる

「ん？」

「・・・？」

二人して同時に振り向く

すると・・・

「何だあ、デート？茜さん、お邪魔だったかなあ……」

俺らの背後には、クラスメイト……茜が居た

「あら、茜じゃないの……」

「なんだ、帰ったんじゃないのか？」

偶然にも遭遇した茜

どうやら見たところ、一人らしい

「いやあ、家にいても暇だったし、お買い物ついでにね」

茜の席には、いくつか紙袋が置いてある

多分、夕飯の食材や、洋服なのだろう……

「えへへ……結構買っちゃったんだよねえ」

舌を出して笑う茜

「そうね……でも、お金の無駄遣いはよしてよね……休みの……にも……」

杏は後半の部分、小さくヒソヒソと言う

俺はあまり聞き取れなかったが、どうやら茜には伝わったのか、うんうんと頷いてる

「ああ、うん……ごめんごめん……」

茜は小さく杏に謝る

「おい、何の話だよ？」

途中で話には俺は割り込む

「えっ？あ、うん……何でも無いよ？何でも無いからね？」

茜は明らかに動揺をしている

「本当に何でも無いわよ。気にしなくて良いから……」

杏がフォローを入れる

……まあ、今は気にしないで居るか

「そうか、んまあいいや……っと、杏は注文しないのか？」

既にメニューを開き、何を注文するか選んでいる俺

あんま高いのは止めておかないとな……

「んじゃあ、俺は……みたらし団子で良いかな……」

「そうね……私は、栗ぜんざいが良いわ」

お互いに選り終わり、店員を呼ぶ

「さてと・・・あたしはもう食べ終わったし、そろそろ帰るね。じゃ、デート楽しんでね〜」

茜は荷物をまとめると店を出て行く

「いらんことは言わなくて良いからなあ。んじゃあなあ」
突っ込みと一緒に手を振り、見送る

「ええ、またね・・・」

杏も小さく手を振る

茜が店を出て数秒後、店員が来て俺らはそれぞれ注文をする
そして、二人で食べながら話をしては盛り上がった

一時間ぐらい経っただろう・・・

そろそろ空も暗くなってきた

「そろそろ、店を出るか・・・暗くなってきたなあ」

「そうね・・・じゃあ、行きましょ」

杏は立ち上がり、会計に向かう

俺もその後についていき杏を待つ

そして待つこと数分・・・

「さ、会計もしたし、行きましょ」

「おう・・・んでも、どこ行くんか？時間も時間だし・・・」
時間はもうすぐ5時半

季節も冬なので、結構暗い

まあ、それでもデートを続けるのは、いつものことなんだが

俺らは歩いていくうちに、自然とこの高台に足を運んだ

暗く、冷たい風が吹く

2年前・・・

俺たちの思い出の場所・・・

お互いに、気持ちを伝え合った場所・・・

そして、俺らは今・・・こうして幸せにやっている

「綺麗ね・・・」

杏が、街を見ながらいう
でも、俺は街よりも

桜が舞い、月の光をあびた、杏の姿に夢中になっていた

街だの何だの・・・それより、何よりも、杏が綺麗に見えた

そして自然と俺は杏を抱いていた

「・・・義之・・・あつたかい・・・」

杏は、冷えた体で俺を抱き返してくれる

「そういうお前は、かなり冷えてるぞ」

小さく微笑みかける

「仕方がないじゃない・・・冬だし・・・」

杏は、クスクスと笑う

「だな・・・」

そして、お互い見つめあう

「・・・」

杏は目を瞑って、まるで何かを待っているように見える

俺は、顔を少し近づける

二人の息がかかり合うくらいの距離

「・・・」

俺らは、唇を重ね合わせた

深く・・・お互いを確かめ合うように・・・深く・・・深く・・・

少し経つと、唇が離れる

杏も俺も、顔が真っ赤になっていた

胸もドキドキしている

無言の状態のまま、何分かが過ぎた

「・・・そろそろ、帰るか」

無言の中、俺が喋りだす

それに続いて、杏も

「そうね・・・もう遅いし・・・」
杏の手をとり、家に向かう

「今日は、いろいろとありがとな」

杏の家の前

別れ際にそういうと、杏は微笑む

そして、家に入るまで見送ると、俺も家に向かって歩きだす
冷たい風が吹く中、俺はずっと杏のことを思っていた・・・

第四章（後書き）

こんばんは。

今まで頑張ってきましたが、ネタがorz

なので、まことに申し訳ありませんが、一度ここで完結です。

現在新しい小説を頑張っておりますので、今後もどうぞよろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3884f/>

D,C,2 アナザーストーリーズ ~大切な今~

2010年10月11日19時49分発行